

実践を記す・実践を伝える・ 実践から学ぶ

齋藤 ひろみ / 東京学芸大学 金田 智子 / 学習院大学 浜田 麻里 / 京都教育大学

『イマ×ココ』創刊準備号の発行にあたり、この雑誌を通して、言語教育や言語学習支援の場に何を届けたいのか、また、実践を記録して伝えることにどのような意味を感じているのか、教育や支援に関わりながら、私たちは、今、「実践の共有」を通して何を学ぼうとしているのかについてお話しします。

1 教育・支援の現場からの「問い」

私たちは、現在「実践持ち寄り会」という実践交流の場を企画し、開催しています。また、日本語学校や小中学校、そして地域の日本語教室の教師やスタッフと交流する機会も重ねてきました。

それらの場所で、実践上の課題として耳に入ってくるのは、「学生が、ディスカッションをしてもなかなか発言しないのだが、どうすればよいだろうか」「新たに入ってきた児童と前からいる児童ではレベルが違う。どうしたらいいのか」といった自分の現場の課題や問題です。それに加え、「他の先生方は、どんな授業をしているのか知りたい」「自分の実践について、誰かと話し合ってみたい」といった、他の現場や先生・支援者の実践への関心と、自身の実践を共有し検討する場を切望する声でした。

また、こうした声がある一方、他の現場の実践に対して「対象の学習者が違うから」「現場の状況が違うから」「制度が異なるから」等を理由に「参考にならない」という声も聞こえてきます。そこに、それぞれの現場の状況がいかにも異なるか、そして相互の交流がいかに少ないかということが現れていると思われます。

そして、関連領域の研究に関しては、次のよ

うな意見が聞かれます。「研究発表を聞いても、教室の実践にどう結びつくのかわからないし、具体的にイメージしにくい」「新しい方法を試してみたいけれど、具体的にはどのようにすればいいのかわからない」。現場の教師や支援者が、自身の実践と研究との間に大きな距離を感じていることがわかります。

これらの現場の声に対し、私たちは、まずもって、現場で行われている実践のありのままを共有することから始めたいと考えるようになりました。それには、現場をどう描き、実践をどう記せばよいのでしょうか。また、それを異なる文脈にいる者同士の間で共有するためには、どう伝えればよいのでしょうか。そして、ありのままの共有が、次なる実践を触発するような学びを生むには、共有の場をどうデザインすればよいのでしょうか。また、そこにどう参加すればよいのでしょうか。『イマ×ココ』創刊準備号の刊行にあたり、これらの問いについて改めて考えてみたいと思います。

2 「現場」と「実践」

2.1 「実践」を語り合うこと

「実践持ち寄り会」（「刊行にあたって」参照）の立ち上げメンバーは、大学教員として、学部学生や院生の授業をし、論文の指導等を行って

います。私たちにとって、「教師」としての現場は大学です。大学で、留学生に日本語を教えたり、日本人学生を対象に日本語教師あるいは学校教員を養成したりしています。また、それぞれ、日本語教育や外国人児童生徒教育に関する研修会などで講師を引き受けることがあり、そこも、私たちにとっては、「研修講師」としての現場です。

私たちは仕事関連の会合で顔を合わせる人が多いのですが、そこではほぼ毎回、自分の現場での出来事を語り合っています。誰か一人が語り始めると、質問が飛び交います。その出来事が起こった場の状況、前後の様子、周囲の反応、そして、それに対する「あなたの意図や反応」等についての問いです。聞き手側は、質問によって出来事の全体が捉えられると、感じたことを語り出します。この営みが、私たちにとって、実践を振り返る楽しみでもあります。

このような実践の語り合いで、皆から繰り返される質問はさまざまです。実践を行った話し手にとって、詳細に観察していなかったことや、意識していなかったために注意を向けていないことへの質問などもあります。授業の様子や学生の表情を思い出しながらその質問に応じることが、自分の実践を振り返ることになります。それが面白く、そこから「時間配分を変えてみよう」「課題の示し方を変えてみよう」「作業の進め方を変えてみよう」といった、小さな改革のアイデアが生まれることもあります。

2.2 「イマ×ココ」を記すということ

私たちは、「その時、その場で起きたことは、その場にいた人が一番よく知っている」という当たり前のことを、大事にしたいと思っています。それぞれの教育・支援の現場は、社会的状況も、教育・学習環境も、その目的も、運営方針も異なる上に、参与する人も異なります。また、昨日と今日、そして明日という時間的経過の中で、全く同じ営みが繰り返されることは決

してありません。そのため、たった一度の出来事を直接見聞きできるのは、その現場でその実践に携わるその人だけなのです。

現場の上記のような特質については、これまでも心理学、教育学の分野で議論されてきましたし、日本語教育の世界でも語られ始めました。例えば、現場心理学を推進してきたやまだ(1997)は「複雑多岐の要因が連関する全体的・統合的場」(p.167)を、その本質的特性として挙げます。また、心理学の実践研究の立場から秋田・市川(2001)は、現場について「大変複雑であり、そこでの出来事は一回限り、個別独自のである」(p.155)と指摘しています。両者の指摘を総合すれば、現場の「全体性」と「個別性」が重要であることがわかります。平易なことばで言い換えれば、現場を捉えるには、「いま、ここ」で起きていることを「そっくり丸ごと」という姿勢が必要だということです。本誌の名称を『イマ×ココ』とした意図がここにあります。

小田(2009)によれば、現場は進行し続ける行為的現実(アクチュアリティ)であり、現場の行為者は、「文化」の文脈に埋め込まれながらも、それを反省的に対象化して、それまでの「文化」を覆すような行為的主体性を発揮し得るそうです。また、現場は、予測不可能であり、偶発の出来事とそこから派生する問題への対処に迫られます。そして、その現場において、人は「当事者」となると言います。こうした営みを、私たちは実践と捉え、その当事者性を重視したいと考えています。「その時、その場で起きたことを、直接見聞きした」実践の当事者が、実践について「丸ごとそのまま」記し、伝え、そして学び合うことが、現場の実践を豊かにすると期待しています。

2.3 実践を探究するということ

日本語教育の世界においても、実践と研究との関係についての関心は高く、近年は実践研

.....

究が注目されています。日本語教育学会では、2005年に学会誌『日本語教育』126号が「日本語教育の実践報告—現場での知見を共有する」という特集を組み、2011年の春季大会では、学会誌委員が「実践報告」とは何か—知見の共有を目指して」と題するパネルセッションを行っています（横山他2010）。

このような流れは、1993年のJLEM（日本語教育方法研究会）の発足、1998年の日本語教育学会研究集会「私の工夫・私の失敗」等の具体的な活動の中にも見られます。また、実践と研究との関係に関しては、「実践＝研究」という立場をとる研究者もいます。自らの実践を内省的に振り返りつつ、その意味を確認し、他者とのインターアクションを積極的に受け入れて、より高次の自己表現を目指す「実践研究」というものが推奨されています。

こうした関心の高まりと実践研究の取り組みには目を見張るものがあります。しかしながら、1で述べたように、実践者の間では、依然として「実践」と「研究」の間には隔たりが感じられるようです。それは、そうした取り組みが現場の豊かさに結びついていないからだと思います。私たち「実践持ち寄り会」の立ち上げメンバーは、いわゆる「実践研究」として公表されてきたものについて、次のような点からの検討が必要ではないかと考えています。

- ・ 実践を理論の枠に押し込めてはいないか？
- ・ 特定の切り口で実践を文脈から切り離し、分節化してはいないか？
- ・ 実践に内在する知（実践知）の総体を描きだせているか？

現場の本質である「全体性」と「個別性」が、これまでの実践研究では十分には探究されていないと感じるのです。

やまだ（前掲）は、現場を対象とする研究の

あり方について、「複合的システムとして機能するために要素化や単純な変数による分析が困難」だとします。また、秋田・市川（前掲）は、「単一原因、単一方向の変化研究ではなく、相乗的相互作用によって複線方向への発達の可能性を射程に入れ、その時の布置を捉えるシステムの見方に立つことが必要になる」と言っています。実践研究の見直しを図るためには、全体性と個別性に加え、文脈性という視点で実践を捉えることが必要だと言えます。

本誌では、この実践の捉え方を、研究によってではなく「実践そのものを持ち寄って共有する」という方法で具現化することを中心に考えています。実践当事者が、実践の中身がわかるもの（授業プラン、教材、学習者の成果物、授業の様子がわかる写真等）を持ち寄って、それを囲みながら語り合う場を創ります。「実践持ち寄り会」が実際の空間を利用した活動であるのに対し、本誌の刊行は「実践を記し」、本誌への掲載を通して「伝え」、それを読み解きながら「学ぶ」という、誌面空間で実践を共有する活動になります。

理論的枠組みに基づき、ある研究方法にのっとり、分析手法を利用して実践を研究することを否定するわけではありません。しかし、研究的な捉え方をしなくても、実践をより良いものにし、現場を豊かにすることができるはずです。実践の当事者が、実践をそのまま丸ごと語って伝え、その実践を共有する過程で、新たな気づきを得て、実践を探究することができると思っています。

2.4 言語教育現場・実践の多様化

本誌は、もう一つ別の視点からも、実践そのものを共有することに重要性を感じています。それは、日本語教育を含め、言語教育に関わる現場と実践は、多様化が進んでいるという点です。日本語教育実践といえば、従来、学校・教室における授業実践を指してきました。しかし、

国内外の現場は、行政によるボランティア養成事業、地域のボランティア日本語教室とその運営、個人による支援活動、On-line 教育・支援等と、学校・教室を超えています。制度・組織化されていない、空間枠のない、多様な参加者（学習者、教師、支援者、研究者、行政担当者等）による、複数の集団が参与する場へと、教育・支援の現場は拡張しているのです。同様に、実践の中身も、授業実践に限らず、ネット上の多言語情報の提供、進学・就職等の相談、不定期の交流活動、期間の定まっていない学習支援、短期の教師研修等、多様性を増しています。それらは、学習以外の目的のための、時間枠のない、定型化された様式・形態のない教育・支援です。多様な文化が交じり合う現場では、それぞれの条件の下、それぞれの課題に応じ、その解決のための実践が展開されているのです。

社会的状況も歴史的背景も異なる多様な現場の実践者が、相互に学び合うには、それぞれの実践を現場の状況とともに総体として捉えることが不可欠だと思われます。まず、互いの現場の状況を知ること、そして、その現場の課題を理解し、そこで行われた実践の全体を知ることです。それから、実践の具体的な中身や出来事について語り合うことが始まります。私たちは、まさにこのようにして実践を語り合おうとしているのです。個人が実践を語り合うことは、あちらこちらで行われているに違いありません。しかし、それがその個人の周囲にとどまってしまうのは、「もったいない」とも感じています。それを広げ、同様の関心や課題をもつ実践者が実践を共有するための場を創りたいと思い、『イマ×ココ』を刊行することにしました。

3 実践を記し、伝え、学ぶために

「実践持ち寄り会」は、直接顔を見合わせながら材料を囲み、双方向のやりとりによって実践を共有できます。しかし、時間的物理的に距

離がある場合には、直接の参加は難しくなります。そこで、実践を共有する場を『イマ×ココ』に広げたいと思います。

誌面では、対面での共有とは異なるため、下の(1)～(3)のような段階を伴います。ここでは、大まかに示します。どのように記し、伝えることが、本誌が目指す「実践の共有」にとって最もふさわしいものなのかは、今も模索しているところです。今後、号を重ねながら、原稿を投稿くださる皆さんとの双方向の議論を通して、検討していくつもりです。

(1) 実践を記すということ

実践を丸ごとそのまま伝えるためには、その現場と実践を知らない読み手でも再現できるように、事実をもとに記録することが期待されます。まず大事なことは、その現場の特性を伝えることです。歴史的にどのような背景をもつか、社会的にどのような意味をもつか、どのようなメンバーによって構成されている集団・組織なのか、教育・支援活動として何を目指しているのか、そのために、どのような活動をしているのか等です。その上で、今回対象とする実践について、読み手が「誰が、何を、どうしたのか。何が起きたのか」を具体的に思い描けるように、情報を提供することが求められます。それには、資料の利用や表現手段の選択、視覚的な工夫など、読み手が理解しやすいようにすることも重要です。また、3つの段階に共通することですが、異なる現場間のコミュニケーションであることを意識し、ことばを選ぶことが求められます。

(1)の段階で、「私の〈実践〉」から「この〈実践〉」へと、いったん「手を離す」ことができます。「手を離す」ことによって、渦中の当事者としてではなく、外側から自分の実践を捉えることができます。それを、第一段階の「記すこと」と考えています。

(2) 実践を伝えるということ

次に、(1) で、丸ごとそのまま記した現場と実践を、自身の解釈を交えて、読み手に伝える段階が必要です。実際には、(1) の作業の過程で「支援時には気付かなかったが、教材のこの部分が良かったんだなあ」「もう一度、学習者の作文を読んだら、学習の成果がここに現れていた」というように、実践から「手を離す」ことに並行して、事実の異なる側面への気付きが生まれると思われます。それを、書き表すことがこの段階です。

留意したいことは、解釈のみを書くことを避けることです。そのまま記した事実、解釈を添えて示すようにしたいと思われます。そうすれば、読み手が、実践のありのままを思い描き、読み手なりの解釈をした上で、書き手である実践者の解釈を読むことができるからです。

ここで、書き手である実践者は、「手を離し」た実践に対し、自身の経験や知識に基づいてさまざまな角度から見直しを行い、見直した結果をことばにして表します。この過程で実践者は、自身に対し、言語観や学習観、教育観や教師観などを改めて問うことになります。また、教師としての知識や技術についても、自己評価をする機会になると思われます。これが、「伝えること」です。

(3) 実践から学ぶということ

読み手は、実践の紹介から多くを学ぶことができます。では、書き手はどうでしょうか。書いたものに対するフィードバックが得られなければ、新たな気付きは生まれなと思われがちです。しかし、実践の事実とその解釈を文章に書き表す活動を通して、実践の次なる課題に向き合うことができるはずです。異なる現場で、異なる立場で実践をしている人を意識して書くことは、多様な異なる見方や考え方について考えを巡らせることでもあります。その結果、新たな実践的課題の発見と、その解決の方向性を

もつことができると思われます。ここで、実践は再び、実践者自身の「手に戻り」、次なる実践に向けた営みが始まります。

先にも述べましたが、読み手にとっては、書き手が記し・伝えようとする事実とその解釈を読み解きながら、自分自身の解釈をもつことが、実践についての学びとなります。実践の具体例がヒントになることはもちろんですが、実践当事者の解釈と自分の解釈のずれや違いが、新たな視点をもたらします。新たな視点を得ることが、読み手には、自分の実践を意味づけし直すきっかけとなります。

そうなるには、読み手側に求められる姿勢があります。1でも紹介しましたが、現場の状況や、教育・支援の対象者が異なる場合には、「ヒントにならない」と他の現場の実践に興味をもてないこともあるでしょう。確かに、2で述べたように、現場も実践も一つとして同じものはありませぬ。しかし「いま・ここで」起きたことについて語り合う中で、共通の問題が見えてくるのではないのでしょうか。その気付きを基に、自分の実践を振り返ることで、解決のための手がかりが得られるかもしれませぬ。読み手には、「実践の共有」のパートナーとして、実践に関する記述を能動的に理解する努力が必要です。

なお、『イマ×ココ』編集委員会としては、将来、誌面での実践の共有と web 上の実践の交流とを連動させて運営することを検討しています。

次のページに、「実践の共有」のイメージを図にしてみました。実践者 A が自分の実践を、他の実践者 B～D と共有する場合です。A がまず実践を記し、伝えます。B～D は、その実践を読み解きます。自身の実践に照らしながら、A の実践について自分なりの解釈を行います。そして同時に、自身の実践を A の実践に照らして意味づけし直します。A は、B～D からの質問やコメントから、自身の実践につい

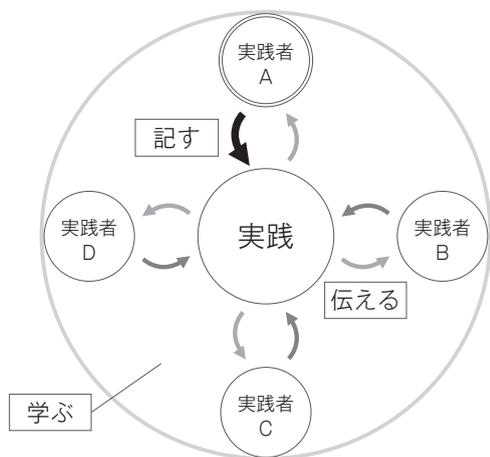


図1 イメージ「実践を記す・実践を伝える・実践から学ぶ」

て、新たな課題とその解決法のアイデアを得て、次なる実践に挑みます。それにより B～D の実践が A にも共有されることになります。

誌面では、直接の質問やコメントの交換はありません。ですが、互いに、異なる現場で異なる実践を行っている実践者を想像しながら、記し・伝え、読み解く活動を行うことによって、学びが起こることが望めます。

4 4 タイプの表現の仕方

「実践の共有」のために、本誌では、4 タイプの実践の表現の仕方を提案し、原稿を募集します。なお、1 ページの行文字数は、「イマ×ココ」HP 掲載の執筆要項を参照してください。

(1) 実践のアイデア・リソース

実施した活動のアイデアや、教材・教具等を紹介するものです。1 時間の授業、あるいは毎日繰り返し行っている活動、利用した教材等を対象とします。例えば、毎時間行っている 15 分の活動、半日で実施した地域の活動、授業で利用した教具などです。現場の状況に示しつつ、「何を、どのように活用するか／行うか」を具体的に表します。日々の実践の中で、偶発的に編み出された活動も、その場で教材の利用方法を工夫したらうまく機能したとい

うようなエピソードも歓迎します。読み手である実践者にとって実践のヒントになる内容であることが期待されます。原稿の分量は 2 ページ以内です。

(2) 実践紹介

現場で実施した授業や活動について、具体的に「いつ、どこで、誰が、何を、どのように教え・支援し／学んだか」を紹介するものです。実践として一定のまとまりのある内容を取り上げます。例えば、2 時間で 1 ユニットの授業実践、あるいは、4 日間の日本語ボランティア研修会、また、半年間の進路指導などです。(1) の「実践のアイデア・リソース」との違いは、現場の状況や対象、実践の概要とその経過、実践内容に関する具体的な情報を提供することです。参加者（学習者、研修生、地域の外国人住民、日本人住民等）の様子について記してあることが望まれます。それによって、読み手は、いつどのようなところで、どのような実践が行われたのかの実像が描けます。原稿の分量は、6 ページ以内です。

(3) 実践報告

実施した授業や活動について、どのような課題をどのように解決しようとし、その結果どうであったのかを報告するものです。「どのような問題があり、どのような条件で」「いつ、どこで、誰が、何を、どのように教え・支援し／学んだか」「それによって、問題はどうか解決されたか／されなかったか」を記述します。(2) の実践紹介との違いは、実践の規模や期間の長さではありません。実践紹介同様、実践が行われた社会的文脈がわかるように、現場と対象者、実践者についての情報の提供が必要です。しかもそれだけではなく、実践課題の明示とその解決のためにどのような実践計画を立てたかを述べます。また、参加者の反応の詳細な記述と、そのことから導き出される成果について言

及することが期待されます。すなわち実践紹介が実践の中身の記述が中心であるのに対し、実践報告では、実践課題と実践内容が照応し、結果もそれに対応させて述べてあることが望ましいということです。ただし、研究としての知見を求めているわけではありません。原稿の分量は12ページ以内です。

(4) 実践研究

実践を研究的な視点から分析し、教育や支援の方法、教師や学習者の理解のための研究知見を提示するものです。「現場の実践課題は、社会的文脈においてどのように位置付けられているのか」「どのような問題があり、どのような条件で」「いつ、どこで、誰が、何を、どのように教え・支援し／学んだか」「それによって、問題はどうか解決されたか／されなかったか」「成果から、どのような知見が得られたか」を記述します。(3)の実践報告の内容に加え、研究の立場から、研究課題の設定、先行研究を背景にした実践の枠組みと研究方法・分析方法の明示、適正な分析と考察、実践に関する新たな研究知見の提示があることが期待されます。

本誌および「実践持ち寄り会」では、実践そのものの共有を中心に活動を展開しますが、先にも述べたように、実践を対象とした研究を不必要だと考えているわけではありません。さらに豊かな実践現場を創るためには、現場の全体性・個性・文脈性を捉える実践研究が重要だと考えています。そこで、本誌にも、実践を表現する4つ目のタイプとして、実践研究を位置付けました。分量は16ページ以内です。

以上の4タイプの表現の仕方で、実践を紹介する誌面空間を創りたいと思います。創刊号からは原稿を募ります。実践者の皆さんから多くの投稿があることを、心から願っています(投稿に関する詳細は、巻末の投稿規程をご覧ください)。

5 おわりに

本誌を、「実践持ち寄り会」と相互補完的に「実践の共有」をする場として位置付けたいと思います。本誌『イマ×ココ』のネットワークを、日本各地へ、そして各国へと、広げたいと思っています。

編集にあたって、編集委員内では、様々な議論が行われてきました。上記の4タイプ中の「実践研究」は必要ない、研究会や学会に任せればいいという意見もありました。また、実践を伝えるモデルやマニュアル的な参考書の作成を検討すべきだという意見もありました。これらの意見については、今も議論を続けていますが、こうした議論が、この『イマ×ココ』発行という実践を、躍動的で魅力ある活動にしてくれています。

編集プロセスで何かを決定しなければならない時に、メンバーそれぞれの経験の違いや「研究と実践の関係」に関する考え方の違いが顕在化します。それが、議論を深め、本誌刊行の意味を二重三重に積み上げる話し合いの契機となっています。ココ出版の小さな事務所で編集委員の面々の熱き議論に加わりながら、これも私たちの実践だと感じています。皆さんとも、同じように、実践について共有し語り合うことを楽しみにしています。

参考文献

秋田喜代美・市川伸一(2001)「第6章 教育・発達における実践研究」南風原朝和・下山晴彦・市川伸一編『心理学研究入門—調査・実験から実践まで』東京大学出版会
小田博志(2009)「第1章 エスノグラフィーとナラティブ」野口裕二編『ナラティブ・アプローチ』勁草出版
中村雄二郎(1992)『臨床の知とは何か』岩波新書
日本語教育学会(2005)「特集 日本語教育の実践報告—現場での知見を

共有する」『日本語教育』126号
茂呂雄二・青山征彦・伊藤崇・有元典文(2012)『ワードマップ 状況と活動の心理学—コンセプト・方法・実践』新曜社
やまだようこ編(1997)『現場心理学の発想』新曜社
横山紀子・宇佐美洋・文野峯子・松見法男・森本郁代(2010)「「実践報告」とは何か—知見の共有を目指して」『日本語教育学会2010年春季大会予稿集』